推薦者：中田眞城子

後路啓子
情報処理学会

会誌編集委員会の裏事情

「事務局長はたびたび変わるけど後路さんはずっと昔からいるから（！）この会誌編集委員会の裏事情を知ってるよね」ということで昔話を少しだけご紹介しようと思う．

編集委員会のこと

私が入社した 1988 年はバブル真っ盛りで学会も裕福だったのだろう．現編集委員の方には申し訳ないが，編集委員会では全委員に毎回 1,000 円の交通費を出していた．5 月には委員が交代するので新旧合同委員会が開かれるのだが，総勢 100 名近くの編集委員が機械振興会館の地下会議室に集まり，そのときだけはお弁当といっしょに缶ビールも配っていた（私の記憶が正しければ）．もちろん今は委員への交通費は廃止，委員会時に缶ビールなどあり得ない話だ．

編集委員会はどうだったかというと，当時は閲読報告書なるものがあり，論文の査読のように 1 つ 1 つの原稿に対して 2 人の編集委員が閲読する．その結果を編集委員会で最終決裁し掲載号を決めていくという，今と違ってとても厳格なものだった．1990 年頃は事務局にはまだ個人のパソコンなどなく，執筆者や編集委員との連絡はもっぱら電話と郵便だった．閲読依頼から著者照会，再閲読依頼とすべて郵便で行っていたので，原稿執筆依頼を行ってから掲載されるまで 7 ～ 8 カ月ほどかかっていたのではないかと思う（ちなみに今は早いものだと 1.5 カ月ほど）．

何度も同じ宛先を手書きしていたおかげで，当時の編集委員のお名前は今でもよく覚えている．5 月号の巻頭コラムを書いていただいた久世和資さんも昔は文献ニュース小委員会の一メンバだった．時が経って今や IBM の CTO である．長く事務局にいるとそんな風に偉くなっていく人を見ることができる．事務局員としての密かな楽しみの 1 つだ．

石田編集長のこと

「本屋さんで売れるような学会誌にしましょう」
「後路さんは好きなようにやっていいですよ，私が全責任を持ちますから」

そんなことをおっしゃってくださったのが初代編集長の石田晴久先生だった．初めて編集長制度ができたのが 1997 年，私が入社して 10 年経ったころだった．それまで幾度となく学会誌の改革が叫ばれ，「○○改善委員会」「××検討委員会」なるものが立ち上がりは消えていた中，ようやく理事会の英断で編集長制度を作ることが決まった．初代編集長は石田先生以外には考えられないということで，当時の会長，学会誌担当理事，事務局長が石田先生のもとへ行き，「編集長にすべてを一任するから石田先生の好きなようにやってください」と頭を下げて，引き受けていただいたと聞いている．

石田先生は，まず見た目から変わったことを知らしめようということで雑誌のサイズを B5 判から A4 判に変更，最初の記事として選んだのは「Windows 98 は 95 とどう違うか」（Vol.39 No.4）．堅苦しい巻頭言は廃止し，会告はすべて Web へ．記事のレイアウトは私たち事務局にすべてを任せ，記事ごとにレイアウトを変えるように，挿絵をふんだんに使うようにとのお達しだった．そんな思い切った改革に対して，ほとんどの方から学会誌が読みやすくなった，面白くなったとの好意的な意見をいただいた．学会誌を面白く楽しくしようという当初の精神は今も引き継がれている．

当時私たち事務局編集部も DTP（Desk Top Publishing）を本格的に始めたころで，少しばかりフォントの勉強などしていた時期に石田先生とお酒を飲む機会があったのだが，ほろ酔い気分で好い気になって「postscript っていいうのはですね」などと石田先生に向かって講釈してしまったことがあった．石田先生はそのときニコニコして私の言うことを聞いてくださっていたのだが，後から考えると石田先生は postscript の大家であって，さらにお酒が 1 滴も飲めないのであった．今でも思い出すと恥ずかしくなる．

それから 2 代目 3 代目編集長と続くのだが，その話はまた次の機会に．

次は会誌編集委員の中で一番その姿に衝撃を受けたジョシュこと片岡欣夫さんに引き継ぎたいと思う．編集委員が一堂に会する中，一人だけ西城秀樹ばりのヘアスタイルとスーツだった．波乱万丈の人生を伺ってみたい．